

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第39号

News Letter

2021年7月30日発行



写真: マラウイ 活動地域の村で調理実習に参加する浜中職員

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health





現地活動の復帰と1年間にわたる遠隔業務の進捗について

ISAPH マラウイ 山本 作真

2020年、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により緊急退避していましたが、2021年4月、1年ぶりに日本人職員2名がマラウイに赴任しました。飛行機から降り立った直後久しぶりに地平線を目にし、また、活動地のムジンバに戻り現地職員やご近所、行きつけの店の店員たちが「久しぶり」と声をかけてくれて、マラウイに戻った実感が湧きました。

退避期間中、現地の活動はマラウイ事務所の現地職員に任せていました。今日では現地でもスマートフォンやタブレットが普及し始めていたため、報告や指示は（時差を除けば）リアルタイムでやりとりができました。遠隔の間、勤怠管理はクラウドで、会議はチャットアプリで、実習はzoomで、会計管理はネットバンキングで行っていましたが、いずれも大きな支障はありませんでした。今回現場に復帰し見ていると、職員たちは出かけた先から家族とテレビ通話をし、自撮り写真をFacebookに載せ、当たり前のように機器の機能を使いこなしていました。彼らの適応力があってこそその遠隔業務だったのだと分かりました。

現地復帰後、最初にすべきことは不在時の進捗の確認でしたが、概ね計画された通りに進行し、現場の状況も報告された通りであったと感じました。私たちの実施している草の根技術協力事業に限らず、無償資金協力や海外協力隊の派遣など、国外で実施中だった全てのJICA事業に邦人の緊急退避が命じられる中、私たちのプロジェクトはその影響を最小限に抑えて活動が継続できた稀有な例になりました。これには、退避の半年前に活動地域の電波環境が2Gから4Gが変わったこと、試験的に現地職員にタブレットを配備していたことなど、運が良かった側面もあります。しかし、それ以上に大きかったのは、現地職員と日本側とが信

頼し、利用可能な技術を把握し、上手く連携できた点でした。

退避中に現地から報告されていた内容には、プロジェクト開始直後と比べて大幅に低栄養の子どもが減っていること、ニンジンやニンニクなど従来は村に全くなかった作物が栽培されるようになったこと、それらの作物を使ったレシピを日本から遠隔で紹介し村で好評を博していること、活動地域外の人々も低栄養児の現象や料理の噂を聞きつけ自発的に調理実習を始めたことなど、時には予想を超える報告を受けていました。これから、ひとつずつ確認して回ることになります。

5月、現地でプロジェクト外のトラブルが起こり、再赴任した日本人職員は一時的に日本へ戻ることになりました。近く復帰できる見込みですが、その後には3年間続いたプロジェクトの締めくくりとして、エンドラインの調査を実施予定です。プロジェクト開始時点の2018年と比較して、介入の効果を測定するのが目的となります。その他、人々に栄養や保健、農業についてどのような変化があり、その動機は何だったのかなどについても、詳しく調べていく予定です。人々の行動を後押ししたのが、子どもの健康に対する意識の高まりであったのか、それとも紹介したレシピが美味しかったからなのか、新たに栽培した作物の売り上げが大きかったのか。どのような介入が人々を変えるのか、科学的に検証できればと考えています。



出張先から娘とテレビ通話する現地職員のMr. チマリロ



活動地カヴィトウクトウ村にて、調理実習後の母親グループと

4年ぶりのマラウイへ

ISAPHマラウイ 浜中 咲子

昨年4月にISAPHマラウイ事務所の業務調整員として入職をしましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で日本から1年ほどリモートワークでマラウイの現地職員たちと一緒に働いてきました。そして、2021年4月24日に、待ちに待ったマラウイへの渡航が叶い、現地に赴任をしました。JICA海外協力隊以来、4年ぶりにマラウイの地に降り立ち、日本-マラウイの遠隔で共に業務を行っていた現地職員たちと、ようやく顔をあわせ挨拶を交わすことができました。

初めて会うまでは少し緊張をしていましたが、実際に会ったマラウイの現地職員たちは、笑顔で迎えてくれました。マラウイは「Warm heart of Africa」と呼ばれていますが、そのあたたかさを実感することができました。

その後、活動地域の村の調理実習に2箇所ほど参加しました。1箇所目では、キャッサバフリッターと新規導入作物であるニンニクを使ったミートシチュー、そして2箇所目ではトマトライスとフライドチキンの調理実習を行っていました。1箇所目で調理をしたキャッサバフリッターは、スタッフからの報告で作っている様子の動画を何度も見ていましたが、実際の調理風景を見るのは初めてでした。事前に想像していたよりも各工程に手が込んでいて、時間のかかるものだなと思いました。しかし、村人たちは自然と各自役割をもち、雑談を交えながら協力して調理を行っていました。まだ北部の現地語が話せないため、調理を手伝いながら村人たちの活動へ参加しました。村にある調理器具などは、村人たちのほうが手慣れているため、教わりながら輪の中に入っていました。

今回、実際に調理実習に参加して得たものがいくつかありました。一つ目は、「食」がコミュニケーショ

ンツールの一つにもなるということを実感できたことです。今までも「食」の役割として、そのような考えを持っていましたが、コロナ禍において新しく出会った人たちと一緒に調理をする機会が減り、その認識が少し薄れつつありました。しかし、今回現地語が話せない中、村人たちと一緒に調理を通じて話に入れたことで改めて集団における「食」や「調理」の役割を実感し、再認識することができました。また、活動面においても、気づきがありました。日本で作成をしていたレシピ動画を初めて村で村人たちと一緒に見ました。その際に一緒に見た動画にはナレーションがついておらず、字幕で調理法を伝えていました。村人たちが動画を見る際には、現地職員のノートパソコンや、タブレットの前に大人数で群がるように見えています。そのため、文字よりも音声情報の方がより有効的だと、実際に村人が動画を見る場面を目の前にして気がつくことができました。今後、村で人気のあるレシピから順次、現地職員のナレーションを追加していくことを予定しています。

1年間、遠隔で現地職員から写真や動画、文章で報告を受けていましたが、実際に自身で村に出向いたことで、たくさんの発見がありました。山本職員の報告でもありましたように、現在は一時帰国中ではありますが、またマラウイへ戻った際には、遠隔中に活動地域へ行けなかった分、現地の様子を実際に自分の目で見つつ、村人たちともっと交流をしていきたいです。



調理前にレシピ動画を見る村人たち



村で食べたトマトライスとフライドチキン



2021年度の昆虫養殖技術普及事業の活動について

ISAPHラオス 石塚 貴章

ISAPHラオス事務所は、JICAと草の根技術協力事業「農村部住民の食糧事情向上を目指した昆虫養殖技術普及事業」を実施し、ラオスの農村部にあるサイブートン郡の3村100世帯以上の5歳未満児を持つお母さんたちに昆虫養殖トレーニングを実施します。本事業の1年目となる今年度の目標は「昆虫種苗ラボの養殖基盤の整備」と「パイロット農家育成」です。

本事業では、支援世帯に安定かつ継続して昆虫養殖トレーニングをするために、ISAPHが運営する昆虫種苗ラボで養殖に必要な昆虫の卵や成虫を生産し続ける必要があります。しかし、昆虫も生き物ですので、きちんとした温度管理や適切なエサの供給をしないと期待した数量を確保できないことや、場合によっては死滅してしまうこともあります。特に、野蚕の仲間であるエリサンは、きちんとコントロールしないと増えすぎてしまい、エサであるキャッサバの葉が足りなくなる恐れがあります。他にも、アリに卵が食べられてしまわないように、養殖昆虫を守るための設備を試行錯誤して設置しています。以前から昆虫種苗ラボで養殖をスタートしていたヤシオオオサゾウムシ（以下、ゾウムシという）はすでに養殖トレーニングが継続実施できるほどの養殖コントロールができています。そのため、6月に日本人職員がラオスに入国したことで開始できたエリサンとトノサマバッタを、昆虫種苗ラボで安定かつ継続して養殖することが目標です。

私たちが3村100世帯以上のお母さんたちに養殖トレーニングを実施するためには、村落栄養ボランティアと村落保健ボランティアの力が必要です。彼らの中から昆虫養殖に興味がある人、トレーニングを受けた

い人の希望を募り、一般のお母さんたちへ昆虫養殖を指導するメンター農家として育成します。各昆虫のメンター農家を育成することが、今年度の目標です。ゾウムシ養殖のメンター農家は16世帯おり、すでに1年以上のトレーニングを実施していますが、その間1世帯も辞めることなく、継続をしています。メンター農家からは、養殖数をより多く拡大することを望む声もあり、私たちが供給したゾウムシの成虫から、産卵、幼虫、蛹、成虫と次世代を育成できるまで自らエサの調達、管理ができるほどモチベーションを高く持っています。今後は、エリサン・トノサマバッタのメンター農家を育成し、一般のお母さんたちに昆虫養殖トレーニングを拡大するための準備をします。

また、昆虫養殖事業では、他にも公益財団法人味の素ファンデーションAINプログラムの助成を受けて、NPO法人食用昆虫科学研究会と共同し、ラオスの昆虫をよりおいしく食べるためのレシピ開発、保存加工の研究を日本とラオスで実施します。

ISAPHラオス事務所の日本人職員は、2020年度はコロナの影響で残念ながらラオスへ入国できず日本から遠隔での活動となりました。しかし、2021年6月に無事ラオスへ入ることができたため、本年度は現地から、よりスピーディーかつアクティブなレポートができますので、ぜひこれからの私たちの活動をお楽しみください！



メンター農家へ養殖トレーニング中



昆虫種苗ラボでの養殖準備

施設分娩率の向上のための調査分析および介入支援の策定

ISAPHラオス 安東 久雄

私が担当する母子保健事業の目的は「予防可能な母子の死亡や健康課題を減少させること」です。対象村で子どもの死亡ケースに共通することは、母子保健サービスを利用していないことが挙げられます。特に「自宅分娩」と子どもの死亡や低栄養に相関関係が見られます。そこで、母子保健事業の目的の達成のために「施設分娩率を向上させる」ことに注力し、安全な出産とその後の新生児・乳児への適切なケア・栄養指導を通して、予防可能な子どもの死亡を防ぎたいと考えています。これまでの調査で、自宅分娩と施設分娩の割合はちょうど半分ずつであることがわかりました。では、自宅分娩を選択する妊婦に対して、いつ、どのような介入をすれば、施設分娩を選択するようになるのでしょうか。

施設分娩率向上のための介入支援策を考えるにあたり、なぜ50%の妊婦は自宅分娩を選択しているのかを探るところから始めました。ラオス国内における先行研究やISAPH現地職員による聞き取り調査によって明らかになってきたのは、以下のような要因です。自宅分娩を選択する主な理由は「病院までの交通手段がない」「お金が準備できない」「自宅分娩の方が心地良い（施設分娩は心地が良くない）」「安産だから自宅分娩で大丈夫」でした。そこで、これらの障害を取り除くべく、各村の村落保健委員会と会議を開き、各村から病院までの交通手段の確保と村銀行から妊婦がお金を借りられる体制を作ることに尽力しました。

この介入によって施設分娩率は高まりましたが、まだ100%には至っていません。外部からの動機付けだけでは、持続的な解決策にはなりません。妊婦の中に



アウトリーチメンバーと一緒に昼食

潜在化しているニーズ（病院で子どもを出産したいという欲求や動機）に働きかけないと、いくら障害を取り除き、施設分娩のお膳立てをしても、ISAPHがいなくなってしまう後には何も残りません。妊婦の本音（施設分娩への正直な気持ち/子どもの命や成長・発育に対する興味関心）を理解することが大切です。本当に郡病院で子どもを安全に産みたいと思えば、ISAPHがいなくても、妊娠期から少しずつお金を貯金したり、隣人から車を借りたりする動機が自然と芽生えるはずで、病院で子どもを産みたいというマインドセットを育むにはどうしたら良いのでしょうか。

どんな介入をしたら妊婦が施設分娩したいという動機が芽生えるかを明らかにすることが今年度の目標です。そのために、今まさに妊婦の本音を理解することに尽力しています。そして、次年度は住民の健康リテラシー（知識・理解）と健康への価値観（興味・関心）をベースに、エンターテイメント性を加えて、妊婦に施設分娩の動機づけを高める介入を仕掛けて、自発的に望ましい行動を選択するように導きたいと思います。そして、最終年度にその結果を検証して、ラオス政府に政策提言することが私の使命です。



ナノイヘルスセンター長の Ms. Soukhanthong に表敬訪問

皆様に応援される組織を目指して

ISAPH事務局 村上 麻友子

はじめまして。昨年度よりISAPHの広報を担当させていただいております。村上と申します。

日頃より、ISAPHをご支援いただいている皆様のおかげで、ISAPHはラオス・マラウイにて精力的に活動を行うことができます。この場をお借りし、感謝申し上げます。

昨年より猛威を振るう新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)の影響で、日本人職員は一時帰国を余儀なくされましたが、現地職員と遠隔にてやり取りを行い、何とか活動を続けることができました。そして現在渡航が叶い、現地の住民と直接関わる機会を得ています。この機会を大切に、皆様からいただいたご支援がどのように使われているのか、現地住民の様子をお知らせしていくことができればと思っています。

2004年から活動を始めたISAPHは、これまでの17年間、ラオスとマラウイにて、現地の住民に寄り添った様々な活動を行い、成果を上げてきました。しかし、それらは一部の援助関係者の方には届いていたようですが、一般の支援者の皆様に広く知られることはありませんでした。現地の人々を見つめ、活動の成果にのみ注力してきたと言えば聞こえは良いですが、私たちの活動が皆様からの支えによって成り立っていることを考えると、「皆様に応援される組織になろう」という気持ちや努力がさらに必要だったのかもしれない。

そのような反省を背景に、昨年より新しい取り組みを始めました。テーマは、「ISAPHをもっと知って・応援して・参加したくなる、情報発信と新事業」です。新しく実施している取り組みの一つは、Instagram、Facebook、Twitterの3種類のSNSです。ラオス・マラウイから届く活動の写真や、スタッフの日々の報告などを投稿しています。Instagramでは写真が中心

となりますので、視覚から直感的にお伝えすることができます。また、それと連動しているFacebookでは、社会課題解決に関心のあるたくさんの方とつながることができています。SNS上での出会いを通じて、インターンとして来てくれたり、一緒に活動を行う仲間になったり、活動を「賛助会員」という立場から応援して下さるようになったり、そんな“きっかけ”づくりに取り組んでいます。

次は、ISAPH賛助会員様向けのオンラインサロン、通称「アイサップサロン」です。アイサップサロンでは、様々な専門分野のスペシャリストや、ISAPHの事業に興味を持たれる賛助会員同士がつながる機会を設けています。ラオス・マラウイで活動する日本人職員と気軽に話をしたり、現地の様子を尋ねたり、新しいコラボレーションのアイデアなどが話題になっています。ISAPHのことをもっと身近に感じていただけるように工夫しています。賛助会員の方でしたらどなたでも参加可能ですので、この機会にぜひご検討ください!

もう一つは、オンライン・スタディツアーです。COVID-19の影響により、海外渡航が難しいため海外研修を断念されている学校が数多くあります。ISAPHも毎年、数件のスタディツアーを受け入れてきましたが、昨年はすべての大学が計画をキャンセルせざるを得ない状況でした。その解決策として、ラオス・マラウイの職員とオンラインでつなぎながらライブで現場の様子を中継し、臨場感のあるオンライン・スタディツアーを計画しています。オンラインであれば、安全に、そして時間に余裕をもって参加することができます。今年は既に1件の大学が参加を希望してくださっています!

最後は、ISAPHの活動を通じて日本国内も元気になる取り組みも計画しています。これまで支援者としてISAPHを支えて下さっているiサイクル様とのコラボレーションがその一つです。国内の小学校や地域でペットボトルキャップを集めて支援して下さった皆様へ、現地からのお礼動画を送ったり、子ども同士のオンライン交流などを企画しています。

もちろん、COVID-19の状況にもよりますが、これまで同様に対面のイベントにも積極的に参加したいと考えています。毎年参加しているグローバルフェスタや、今年度開催されれば参加しようと予定しているイベントがたくさんあります。COVID-19が収束し、皆様に直接ISAPHの魅力をお伝えする機会がくることを楽しみにしています!

どうぞ、これからもISAPHの応援をよろしくお願いいたします。

Instagram, Facebook, Twitter
更新中!!

Instagram

Twitter

Facebook

ISAPHの活動の様子や、国際協力について発信しています!
是非、フォロー&シェアをお願いします!!

国際保健医療協力の想いのバトンを繋ぐ

～インターンシップとフォローアップ・インタビューより～

ISAPH事務局 佐藤 優

こんにちは。事務局の佐藤です。2004年7月に設立したISAPHも、今年で17周年を迎えました。人の出入りが多い現地事務所ですが、昨年もメンバーが大きく交代しました。それから1年が経ち、みなさん新しい環境にも慣れたようで、とても良いチームワークが発揮されています。

さて、ISAPHの活動理念の一つには「人材育成」があります。これまでにたくさんの現地スタディツアーやインターンシップの報告させていただきました。昨年末には、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中でしたが、初めての外国人インターンをISAPHにお招きすることができました。そして2021年3月、また新しく1名のインターンシップを実施しましたので、ここに報告させていただきます。

信岡茉莉さんは、2018年10月からJICAの海外協力隊として、私たちと同じマラウイ共和国で活動していました。臨床検査技師である彼女は、日本での病院勤務経験を活かし、病院のマネジメント手法の一つである5S-KAIZEN-TQMを普及することを目的に活動していたとのこと。しかし、2020年3月、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、6カ月の任期を残して帰国することになります。ずっと感染の収まりを待っていたようですが、結局、再渡航できないまま任期満了を迎えてしまいました。「海外での保健医療協力をもっと学びたかった」そんな心残りを強く感じていました。

そんな時、SNSでISAPHの活動を知ることになります。「インターンでも、ボランティアでも良いので、NGOの活動に触れさせてもらいたい」最初のメールにはそう書かれていました。面接の結果、彼女の人間

性や意欲が良く伝わりましたので、さっそくラオスの事業・マラウイの事業に満遍なく携わることができるようにプログラムを組み、インターンシップを開始しました。

何でも積極的に、そして前向きに学び、吸収していく姿は印象的でした。職員も大変刺激を受けていたようです。1カ月という短い期間でしたが、「最後に何か自分にできることがしたい」と、ISAPHのインターンシッププログラムのプロモーションビデオを作ってくださいました(とっても素晴らしい仕上がりなので、是非、チェックしてくださいね)。このまま一緒に働けるのでは? という話も飛び交うくらいISAPHに馴染んでくれましたが、予定していたスケジュールを消化し、無事、修了しました。

そしてインターンシップを終えて3カ月後となる6月に、信岡さんがどのような進路を歩んでいるかインタビューをさせていただきました。今は、大学院への進学を目指しているそうです。ISAPHでの経験をきっかけに、自身を取り組みたい国際協力について問い直し、どのような道を歩むべきか、やるべきことが明確になったそうです。とてもすっきりとした表情でした。

ISAPHとの関わりを通じて進路が決まり、一步を踏み出せることができたことを心から誇りに思います。もちろん、信岡さんのように「自分から学んでいく姿勢」があるからこそではありますが、もし私たちがその想いの実現にお手伝いができるのであれば、それはとても嬉しいことです。信岡さんのようにISAPHと有機的な協力関係を築きたい方は、どうぞいつでも事務局までご連絡ください!



とても真面目で熱心な姿に、皆が刺激を受けました



別れを惜しみつ、次のステップへ

最近のできごと

2021年2月～5月

- 2月15日～19日** 【ラオス】活動対象地域の10村において、施設分娩促進のために村落保健委員会と合同会議を実施
- 2月18日・19日** 山梨県立大学で講義
- 2月24日** NPO法人食用昆虫科学研究所と共催し、西松建設株式会社において佐伯真二郎氏が社外講師セミナー「ラオスの昆虫食の現場から、世界の未来の食を考える」を実施
- 2月26日～3月29日** 信岡茉莉氏をインターンとして受け入れ
- 3月1日** 【ラオス】日本国際協力システム（JICS）NGO支援事業「ヤシオオオサゾウムシ養殖『モデル世帯』整備プロジェクト」を開始
- 3月4日** 【マラウイ】県保健局主催の会議に出席し、プロジェクトの進捗状況やCOVID-19の感染予防対策などについて報告
- 3月6日** 日本国際保健医療学会第39回西日本地方会に参加
- 3月23日～25日** 【ラオス】食用昆虫養殖パイロット農家フォロー：キャッサバ栽培事前調査
- 4月1日** 【ラオス】味の素ファンデーションAINプログラム「ラオスの美味しい昆虫食普及プロジェクト～養殖昆虫のフードシステム構築～」を開始
- 【ラオス】テルモ生命科学振興財団医療貢献活動助成「ラオス国カムアン県の母子の健康を守る保健サービスの利用推進」を開始
- 4月7日～9日** 【ラオス】食用昆虫養殖パイロット農家フォロー：キャッサバ栽培開始支援
- 4月23日～5月30日** 【マラウイ】山本作真、浜中咲子をマラウイに派遣
- 5月5日～5月14日** 【マラウイ】聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事の浦部大策氏をマラウイに派遣
- 5月21日～23日** 【ラオス】村のリポルピングファンド支援：会計業務PC操作トレーニング



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

法人・一般どちらでも「アイサップサロン」に参加できます。入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

特定非営利活動法人ISAPH

【福岡事務所】

〒813-0034

福岡県福岡市東区多の津4-5-13 スギヤマビル4階
TEL.092-621-8611

【東京事務所】

〒105-0004

東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165
E-mail jimukyoku@isaph.jp
URL <https://isaph.jp/>

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部 部長
理事	江藤 秀顕	神山復生病院 医師
理事	渡部 和男	東京理科大学 特命教授
理事	杉下 智彦	東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座 教授
監事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

【ISAPH ニュースレター 第39号 編集スタッフ】

佐藤 優 / 石原 潤子

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設
(一般病院2〈3rdG:Ver.1.1〉)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病(後)児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。